



Title	19世紀オランダの植民地政策：植民地科学者としてのシーボルト
Author(s)	芦崎, 瑞樹
Citation	パブリック・ヒストリー. 2017, 14, p. 51-69
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66568
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

19 世紀オランダの植民地政策

植民地科学者としてのシーボルト

芦崎瑞樹

1 はじめに

19 世紀、ヨーロッパ諸国による植民地支配が本格化するなかで、西欧諸国は自国が支配する地域の気候・風土・慣習などをより詳細に認知する必要性に迫られた。その結果、ヨーロッパ本土から多くの科学者が動員され、植民地政庁・総督府のもとで現地調査を行うことになった。この科学者たちのなかには、本国において高い名声を誇る者・将来を嘱望される者も含まれていた。学問的野心を持つ科学者にとってまだ調査の行き届いていない「辺境」の地は学問的成果を挙げる格好の場であった。

植民地に赴いて科学実践を行ったヨーロッパの科学者たちは「植民地科学者」と呼ばれ、ここ数十年の間研究の対象とされてきた。彼らには当初から植民地支配に協力した「植民地主義の尖兵」という批判がつきまとった。むろん、本国と植民地を結ぶ帝国のネットワークにおける科学活動は多種多様であり、⁽¹⁾ その活動に携わった科学者すべてを一様に断罪するのは単純に過ぎるだろう。しかしながら、「帝国」と「科学者」というこの二者が、「植民地」という未知の土地で本国よりも強く・不可分に絡み合った独自の関係性を切り結んでいたことは間違いない。このような帝国と科学者の関係性が 19 世紀以降の植民地運営において大きな重要性を持っていたことは間違いないと言えるだろう。

本論文では、オランダ領東インドを巡って活躍した科学者と帝国との関係、具体的には、オランダ領東インド総督府とフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトとの関わりを考察する。シーボルトという人物は、従来「日本史」という領域のなかで、特に外来の学問受容を扱う「洋学史」という領域のなかで多く研究の対象となってきた。しかし、本論文では、日本史・洋学史といった従来の枠組みを超えてシーボルトを世界史上の大きな動きと関連付けることを目指す。後述するように、シーボルトはカール・フォン・リンネ（1707-1778）の分類学研究やアレクサンダー・フォン・フンボルト（1769-1859）の南北アメリカ探検などに強く影響を受けた、18 世紀的な博物学者であった。一方で彼を雇ったオランダ、そして東インド総督府はジャ

(1) M. Harrison, 'Science and the British Empire', *Isis*, 96(1), The University of Chicago Press, 2008, p. 56.

ワにおいてより徹底的な植民地支配・経済政策を目指すようになっていった。このような帝国の思惑は否応なくシーボルトの活動に影響を与えたはずである。そして、19世紀前半という時代において、このような帝国と植民地科学者との間の関係性の変化は、世界中で同時並行的に見出だせるはずである。

本論文においては、シーボルトを「植民地科学者」としてとらえなおし、彼が出島に滞在した1823年から1828年の間、彼と東インド総督府がどのような関係にあったのかを明らかにしたい。そのことによって、日本人にとって馴染み深いシーボルトという人物の新たな姿を描き出すとともに、19世紀初頭の西欧植民地周辺における植民地科学者と帝国との関係性を明らかにしていきたい。

2 植民地科学者としてのシーボルト

(1) シーボルトの半生と時代背景

フィリップ・フランツ・バルタザール・フォン・シーボルト (Philipp Franz Balthasar von Siebold, 1799-1866) は、1796年バイエルン州ヴュルツブルクの学者・貴族の家系に生まれた⁽²⁾。彼は1815年にヴュルツブルク大学医学部に進学し、医学・化学・解剖学・植物学・薬学・物理学・人類学を学んだ。在学中のシーボルトの興味はむしろ博物学や民族学にあったが、大学卒業後はハイディングスフェルトで開業医となった。しかし、医師として勤務しつつも、シーボルトは海外での探検・調査活動に参加できないか模索し続けていた。その時シーボルトはオランダ政府がオランダ領東インド植民地に赴任する医師を募集していることを知り、ハーグへと向かった。シーボルト家の縁故などもあり、シーボルトは植民地陸軍軍医少佐の地位と、俸給月額300グルデン(年額3,600グルデン)というかなりよい条件を得ることができた。シーボルトを乗せたフリゲート船デ・ヨンゲ・アドリアーナ号は1822年9月23日にロッテルダム港を出航し、翌年2月13日に、オランダ領東インド植民地の政庁所在地であるバタヴィアに到着した⁽³⁾。

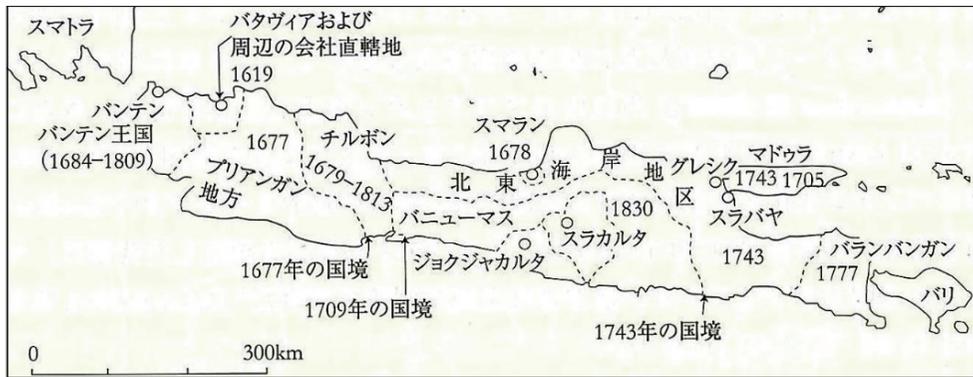
ここで、当時のオランダとオランダ領植民地がどのような状況にあったかについて触れておきたい。1795年、ナポレオン戦争の敗北によってオランダ(ネーデルラント)はフランス軍に占領され、一時その支配下に置かれることとなった。この混乱の中、オランダ本国と植民地との交流は途絶え、1799年にはこれまでオランダ本国と植民地との貿易を一手に担っていたオランダ東インド会社(Vereenigde Oostindische Compagnie, 通称VOC)が倒産した。イギリスはオランダ領植民地が敵国フランスに渡ることを恐れ、1811年に東インドを接収した⁽⁴⁾。ナポレ

(2) 彼の父が早くして逝去したため、経済的には困窮していたとされる。

(3) 栗原福也編・訳『シーボルトの日本報告』平凡社、2009年、310-312頁(以下、『日本報告』と略す)。

(4) この時に東インド総督に就任したのがシンガポールの創設者として名高いトマス・スタンフォード・ラッフルズ(1781-1826)である。彼のもとで行われた地稅改革・學術振興活動などは後のオランダ統治期にも引き継がれた。

図1 東インド地図 (数字はオランダによって領有された年)



出典：大橋厚子『世界システムと地域社会—西ジャワが得たもの失ったもの 1700-1830』、京都大学学術出版会、2010年、33頁。

オン戦争が終わり、1815年に新王ウィレム1世のもとオランダの主権が回復すると東インド植民地は返還され、東インド会社を経由しない直接の植民地統治が開始された。⁽⁵⁾ ウィレム1世は統治にあたって植民地の住人の状況・動植物・鉱産物といった現地の正確な状況を把握することを目指して、多数の画家・調査員・科学者からなる調査団をジャワ島に派遣した(地図参照)。

現地調査のため、植民地大臣および東インド総督の管轄下に自然誌委員会(Natuurkundige Commissie voor Nederlandsch-Indië)が設けられた。委員の中心メンバーとなったのは後のライデン大学附属植物園長であるプロイセン出身の植物学者C. G. ラインワルトや、同じくプロイセン出身で、のちにライデンの国立標本館長に就任した植物学者カール・ルートヴィヒ・ブルメ、H. クール、ファン・ハッセルトといった高名な科学者たちである。彼らは総督府の管轄のもと、植民地の探検と博物学的調査、自然物収集などに従事した。

シーボルトが東インド植民地に着任した時期は、オランダが本格的な植民地支配に乗り出そうとするまさにその草創期であった。また同時に、自然誌委員会やバタヴィア学芸協会のもとで、東インドの博物学研究が本格化しつつある時期でもあった。バタヴィアに到着したシーボルトはラインワルト、ブルメ、ハッセルトといった名高い科学者らと共に、その自然誌委員会に籍を置いた。また、シーボルトは東インド総督の命令で1823年に出島に着任した後も、これらの科学者らと密接に連絡を取り合っている。⁽⁶⁾

ジャワ到着の半年後、東インド総督ファン・デル・カペッレン(1778-1848)はシーボルトに日本への赴任を命じた。ジャワ勤務を予想していたシーボルトは戸惑いつつも日本への船に

(5) 1824年のロンドン条約によってオランダはインド、マラッカなどのイギリス勢力圏から撤退を強いられ、その代償としてジャワ、スマトラなどいわゆる東インドの既得権益をかるうじて確保することができた。宮本謙介『概説インドネシア経済史』有斐閣、2003年、96頁参照。

(6) 栗原福也編・訳『日本報告』、322-323頁。オランダ領東インド周辺で活動する植民地科学者には今のドイツにあたる地方の出身者が多かった(ラインワルト、ブルメなど)。これはオランダ東インド会社時代からの伝統でもある。永積昭『オランダ東インド会社』講談社、2000年、参照。

乗り込み、1823年8月に長崎・出島に到着した。その地で医者として勤務しつつ、日本人の患者たちに西洋式の治療を施したこと、高野長英ら蘭学者と交流したこと、日本人女性タキを妻とし、娘・楠本イネをもうけたこと、禁制品持ち出しの容疑によって逮捕されたこと（シーボルト事件）などは今でも広く知られている。しかし、実際に東インド総督府が彼に託した任務とは、どのようなものだったのだろうか。

(2) 先行研究

戦前から、彼の存在は日本における西洋近代医学の受容・発展をひもとく洋学史研究のなかで重要視されてきた。シーボルトの評価を決定付けた書物が、1926年に日本の医学者・呉秀三によって著された『シーボルト先生 其生涯乃功業』である。呉はシーボルトの功績について「我邦・我民を学問上に研究して之を外国に紹介したること」、「⁽⁷⁾欧羅巴の学問殊に医学上・科学上の知識を我邦の人々に分与したること」の2点を挙げ、日本を西洋に紹介した「日本学の大家」として、西洋の科学知識や医療技術を日本にもたらした名医として彼を位置づけた。このような評価は現在も変わらず受け継がれていると言える。⁽⁸⁾

しかし、近年では、シーボルトの出島での活動の中心は医療活動ではなく、むしろオランダが彼に委託した「研究活動」であったことが指摘されている。その根拠として、東インド総督府がシーボルトに対して年間約8,000グルデンもの「博物学研究費」なる予算を与えていること⁽⁹⁾や、シーボルト自身が「博物学研究に専念するため外科医としての職務を免じて欲しい」と述べて、総督府から許可されていることなどが挙げられる。⁽¹⁰⁾これらの事実を踏まえると、シーボルトと総督府の両者が、出島での研究活動を医療活動よりも重視していたことは明らかである。⁽¹¹⁾したがって、日本におけるシーボルトの任務を考えるためには、「医師」としてではなく「科学者」としての彼の姿を見なければならぬ。それでは、彼の日本における調査活動とはどのようなものであったのか。シーボルトと総督府の間で交わされた書簡には、彼が日本において「博物学調査に従事している」という表現が多く見られる。この「博物学調査」とは具体的にどのようなものだったのであろうか。

この問いについては、主に洋学史・日蘭交流史分野で研究が進められてきた。洋学史の専門家、沼田次郎は、シーボルトが商館付医師としての通常の任務のほかにとくに日本の「総合的学術研究」という任務を付与されていたことを指摘したうえで、彼の使命は、戦乱のために中断された日蘭貿易をできるだけ早く回復するために、改めて日本の民族・制度・地理・資源な

(7) 呉秀三著、岩生成一解説『シーボルト先生 その生涯及び功業』平凡社東洋文庫、1968年。

(8) 栗原福也編・訳『日本報告』、308頁。

(9) これは、彼の医師としての俸給をはるかに上回るものである。先述したようにシーボルトは様々な学問に精通した18世紀的な博物学者であり、化学・解剖学・植物学・薬学・物理学・人類学など、複数の学問について高水準の知識を有していた。それに加え、彼は測量の技術なども身に着けていたと言われている。

(10) 栗原福也編・訳『日本報告』、56頁。ちなみに、先ほどのシーボルトの要望に対して、総督府は、特別手当の給付、薬剤師・画家の派遣、望外の資金提供によって応えた。

(11) 栗原福也編・訳『日本報告』、47頁。

ど多方面にわたる総合的調査を行い、現地の状況を明らかにすることを指すものであったと結論付けている。⁽¹²⁾

このように、従来はシーボルトの任務について「日蘭貿易回復のための現地調査」というような、当時の日蘭関係を軸とした説明が多く行われてきた。しかし、1990年代末から新史料の翻訳が進むとともに、新たなシーボルト像を描こうとする研究者が現れてきた。栗原福也によれば、19世紀初頭という時代において、オランダにとっては東インド運営が最大の優先事項であり、貿易拡大の観点から日本を調査する余裕はなかったという。また、日蘭貿易は東インド会社時代から利益薄になっており、オランダにとって魅力を失っていたという。⁽¹³⁾このような状況を考えると、オランダがシーボルトに、日蘭貿易の再建につながるような総合的調査を期待した、という議論は説得力を失うことになる。

シーボルトは後の大著『日本』において、日本の風俗・文化などについて詳細な民俗学的考察を残しており、彼個人が日本の民俗学的研究に大きな関心を抱いていたことは確かである。しかし意外なことに、当初、総督府が彼に依頼した「博物学研究」には、そのような民俗学的研究は含まれていなかった。シーボルト自身が東インド総督に、日本での「総合的学術研究」を許可してもらえるよう嘆願した結果、このような民俗学的研究が許されたのである。⁽¹⁴⁾この嘆願が受け入れられた背景には、東インド総督ファン・デル・カペッレンのシーボルトに対する個人的な支援と熱意が大きく関わっている。カペッレンはラッフルズの再興したバタヴィア学芸協会の活動を強力に支援し、バリ島やカリマンタンに調査団を派遣するなど、開明的な「学芸のパトロン」として、東インドの博物学研究に大きな理解を示した人物である。⁽¹⁵⁾しかし、このことから逆に明らかとなるのは、総督府の興味を中心はシーボルトが最も情熱を注いだ民俗学的研究とは別のところにあった、ということである。栗原は、オランダがシーボルトに与えた博物学研究費の内実を詳細に検討したうえで、オランダが彼に期待した「任務」を次のように分析している。

史料によれば、出島商館付外科医に任命されたシーボルトは博物学研究の宝庫である未知の国、日本における研究と調査に熱い志望と野心をいだき、総督に対し強く研究援助を要請し、幸いにも同行する新商館長デ・ステュルレルにより特別手当の推挙を受けた。来日以後も彼は熱心に研究費の申請をして毎年約8,000グルデンもの研究費を受けた。

しかし、総督はこの研究費をシーボルトの博物学の研究費というよりも、初年度（24年度）の出島における植物園設置とシーボルトの住居設備のための2,100グルデンを含めて、主として日本産植物を毎年バイテンゾルフ植物園に送らせ、また動植物標本を作成させるた

(12) 沼田次郎『洋学』日本歴史学会編集、吉川弘文館発行、1996年、172-173頁。

(13) 栗原福也「フォン・シーボルト来日の課題と背景」箭内健次、宮崎道生編『シーボルトと日本の開国近代化』統群書類従完成会、1997年、50頁（以下、「来日の課題と背景」と略す）。

(14) 栗原福也「来日の課題と背景」、50頁。

(15) 栗原福也「来日の課題と背景」、16-17頁。

めに支出させようとしたのではないか。そして、それらのものはバタヴィアを経由してさらに本国の植物園や博物館へ送られるはずだったのではないか。出島の植物園の設置自体がむしろバタヴィアへの送付のための植物収集と生きた植物をまとめて発送するための中継地点の役割を担っていたのではないか。⁽¹⁶⁾

栗原は、支出表の詳細な分析に基づいた上で、東インド総督府が莫大な「博物学研究費」を与えてシーボルトに期待したのは、主として「日本産植物を毎年バイテンゾルフ植物園に送らせ」ること、そして、「動植物標本を作成させること」であったのではないかと結論付けている。⁽¹⁷⁾

3 オランダの「植物輸送・研究ルート」

(1) 19世紀オランダの植物学政策

オランダ政府および東インド総督府は日本産植物の収集と標本作成に強い興味を寄せた。その関心にこたえるために、シーボルトの来日とともに建設されたのが出島植物園であった。収集された植物はこの植物園で培養され、その後船舶でバタヴィアへ、そしてその後背地であるバイテンゾルフへと輸送されたのである。さらに、一部の植物はそこからオランダ本国に向けて船舶で輸送された。オランダ本国ではホラント州ライデンが栽培・貯蔵・研究の中心となった。

出島・バイテンゾルフ・ライデンというこのグローバルな植物輸送・研究ルートが19世紀オランダの植物学研究において重要であったのだ。シーボルトの存在を見る際には、このようなオランダの植物輸送ルートが背後にあったことを考慮に入れる必要がある。19世紀前半の出島は、オランダの植物輸送・研究ルート上にあったと言えるのだ。この3か所には優秀な植物学者が多く在籍し、植物生体・標本の送付など密接にコミュニケーションを取りあっていた。シーボルトはバイテンゾルフ植物園長であるブルメと頻繁に書簡をやり取りし、植物生体・標本の交換を行っていた。また、初代のバイテンゾルフ植物園長であったラインワルトは本国ライデン大学に大量に植物を輸送するとともに、ヨーロッパ帰国後にはライデン大学植物園長という重要なポジションに就任することになる。ここからは、ライデン、出島、そしてバイテンゾルフの各地に設置された植物園やその周辺施設について詳しく見ていきたい。

(2) ライデン

本国オランダでは、名門ライデン大学を中心に植物園や博物館が密集し、外来植物の蓄積・分析センターとなった。「博物学の父」リンネとも関わりの深いライデン大学にはヨーロッパ最古の近代的植物園が附属しており、世界中の植物生体がこの植物園に移植された。その総数

(16) 栗原福也「来日の課題と背景」、48頁。

(17) 当初から調査費で入手したシーボルトの収集品の一切は政府の専有であることが厳格に規定されていた。栗原福也編・訳『日本報告』、21-22頁参照。

は、1821年初期の段階で5,000種を超えたとされる⁽¹⁸⁾。

1822年には、バタヴィアから帰国したラインワルトが園長となり、植物園のさらなる拡充が図られた。ラインワルトはボン、グライフスヴァルト、ゲッティンゲン、ミュンヘン、ハンブルク、リエージュ、パリ、ロンドンといったヨーロッパ内の植物園だけでなく、ケープタウンやスリナムなどの植物園とも定期的に植物生体の交換をおこなった⁽¹⁹⁾。シーボルトの出島植物園で栽培された植物も、この植物園に移植されて栽培されたのである。大学植物園の周辺には、国立標本館(1816年創立)、国立自然誌博物館(1820年創立)、国立植物学博物館(1829年創立)などの研究機関が建設された。海外から採集された動植物生体・標本はこれらの機関において研究の対象になったのである⁽²⁰⁾。

(3) 出島

出島植物園は1824年に建設された。その設計はヨーロッパ式のもので、日本人の庭師が手入れを行った⁽²¹⁾。その設置には1500グルデン、毎年維持には600グルデンという多額の調査費が投じられた。シーボルトは長崎周辺の遠出の機会を利用して日本産植物を採集し、植物園に植え付けた⁽²²⁾。また、日本人の花木商と取引し、全国の植物を取り寄せた⁽²³⁾。また、植物採集の際には鳴滝塾の門弟が植物採集に大きな役割を果たした。書簡には、「二人の門弟を肥後と筑前の地方へ派遣しました」という記述がある⁽²⁴⁾。彼らはシーボルトから西洋医学を教わるのと引き換えに貴重な日本産植物や、その情報を提供したのである。これらの方法によって、1824年には、300種類以上の植物が出島に移植された⁽²⁵⁾。そして1825年には、その種類は1000種類に達した。

(4) バイテンゾルフ

バイテンゾルフ国立植物園はバタヴィアの南約60kmの都市バイテンゾルフ(現在のボゴール)に建設された。バイテンゾルフは、標高260m、年平均降水量3000~4000mm、湿度80~90%の湿潤なゆるい雨季と乾季をもつ熱帯モンスーン気候であり、植物の馴化・養殖にふさわしい土地であった。植物園の設計はイギリス占領期の総督ラッフルズの発案を原型としたものであり、自然誌委員長ラインワルトが初代園長となった。現在でも熱帯・亜熱帯の世界各地の有用植物が栽植されている世界最大級の植物園である。植民地時代は外部への展示活動

(18) Andreas Weber, *Hybrid Ambitions: Science, Governance, and Empire in the Career of Caspar G. C. Reinwardt (1773-1854)*, Leiden University Press, 2012, p. 194.

(19) *Ibid.*, pp. 194-195.

(20) *Ibid.*, p. 182.

(21) 栗原福也編・訳『日本報告』、127頁。

(22) 栗原福也編・訳『日本報告』、99頁。

(23) 栗原福也編・訳『日本報告』、127頁。シーボルトは花木商について、「日本で非常に多い」と記述している。19世紀の日本での園芸活動の活発さが伺える。

(24) 栗原福也編・訳『日本報告』、66頁。

(25) 栗原福也編・訳『日本報告』、68頁。

よりも調査・研究、有用な熱帯経済植物やその種子の収集に力が入れられてきた。初代園長ラインワルトは東インド全域から 900 種余りの植物をこの植物園に収集した。彼がオランダ本国に帰国すると、C. L. ブルメが 2 代目園長となった。植物園で気候馴化された植物は、園内で研究の対象になるものもあったが、多くの植物生体はライデン大学附属植物園へ、植物標本は国立標本館へ発送された。⁽²⁶⁾

1830 年にオランダ人庭師の E. テスマン (1808-82) がバイテンゾルフ植物園の学芸員 (実質は植物園の責任者) として任命されると、さらに多くの植物生体が、バイテンゾルフへ輸送・移植された。1848 年にはアブラヤシが西アフリカから移入され、デンプン質で生産効率の高い南米原産のキャッサバが東インド全土に広められた。1852 年から 54 年には南米からキニーネが導入された。また、3 代目園長 (1869-80) のシェファアはオーストラリアのユーカリ、タバコ、リベリアのコーヒーなどの台木を育成して種や接ぎ木を全土に配布した。このように、19 世紀中盤になると、バイテンゾルフ植物園は東インドを越えて、南米、西アフリカ、オセアニアなどから採集された外来植物の馴化と繁殖を担うようになったのである。⁽²⁷⁾

植物学者の野間晴雄は、オランダの植民地科学政策において、イギリスのようなプラントハンター、植民地植物園を配下に置いた顕著な階層構造は形成されず、オランダの植物学政策の特色は、バイテンゾルフ植物園を植民地支配の地域センターとして機能させ、地域振興と熱帯地域の植物研究の中核たろうとアジアに足を下ろしたことにありと述べている。⁽²⁸⁾

出島でのシーボルトの活動は、オランダ・ライデンを中心としたグローバルなルート上で考察され直さなければならぬだろう。そのように考えたとき、シーボルトの植物生体採集・輸送活動の性質が、1827 年を境に変化していることに気づかされる。栗原の論文は、この変化を見過ごしているのではないか。ここでは、具体的にジャワと出島の間で交わされた 1824 年の書簡と 1827 年の書簡を比較し、彼の任務に起こった変化について考察する。

4 書簡比較

(1) 植物生体収集・輸送任務の実態・1824 年 6 月 5 日書簡

1824 年の書簡とは、彼が出島に到着した 1 年後に、バイテンゾルフ植物園長ブルメから東インド総督府宛に送られた 1824 年 6 月 5 日付の書簡である。これは、植物園がシーボルトに植物生体を送らせるよう総督に要望するもので、シーボルトの出島における初期の任務を見る上で重要な史料である。

(26) 栗原福也編・訳『日本報告』、322 頁。

(27) 野間晴雄「東洋の植物を求めて——植物園・プラントハンター・園芸家の文化交渉学」『東アジア文化交渉学研究』別冊第 4 号、関西大学文化交渉学教育研究拠点、2009 年、116-121 頁。

(28) 野間、前掲論文、121 頁。

オランダ領東インド植民地総督宛書簡

バタフィア 1824年6月5日

私のもとに、1823年4月24日付文部・産業・植民地大臣書簡の写し第20 60-6と、それに付した王立ヘント農業・植物協会長の書簡の写しが添えられた、(総督からの)9月19日付書簡Lが届き、その欄外に、(以下の要望に関し)遅延なく必要な処置をとるようにと書かれていました。すなわち、協会長の書簡はそれに添えられたリストに記載された日本の植物類ができるだけオランダへもたらされるよう要望しております。フォン・シーボルトの日本への赴任と、同医師に博物学の調査をゆだねたことによって、同リストに記載されたものばかりではなく、他の多くの植物類を入手し、(本国へ)送り届けることが容易になったので、私は同医師自身と文通をすることが賢明だと考えております。そのようなわけで、私は種々の植物(名)を記した表を作成しました。おそらく、フォン・シーボルト医師が一番早い船便でこれらの植物の多くをバタフィアに送り届けることに労を惜しまないことと思います。そうすれば、受け取った植物を(オランダへ)移送する準備のために、当国立(バイテンゾルフ)植物園で元気をつけるように世話をしたあとで、よい時季をみて、まとめてオランダへ輸送することができ、遅くとも本年末には輸送にとりかかれるでしょう。[中略]オランダの(ライデン)大学植物園に日本の植物を今後できるだけ多く増やすことができるように、閣下においてどうかつぎのように定めていただければ有効かと存じます。

1. 外科少佐フォン・シーボルトに対し、毎年大量の生きた植物ならびに種子、ことにきわだって有益かつ注目すべき性質のものをバタフィアに発送するよう指示すること。
2. それらの送付に当たっては、とりわけ国立バイテンゾルフ植物園長の要望に注意を傾けること。
3. すべての生存草木類および種子を、(バタフィアから)さらにバイテンゾルフへ向けて転送するように、バタフィアの財務局長に依頼すること。

国立バイテンゾルフ植物園長 C. L. ブルメ⁽²⁹⁾

まずブルメは東インド総督に対して、「日本の植物類ができるだけオランダへもたらされるよう」求めているという本国から送られた書簡の写しを確認したと述べた後、それにブルメ自身が数品目を追加したリストを作成した上でシーボルトに送り、「これらの植物の多くをバタフィアに送り届け」てもらおうよう取り計らって欲しいと東インド総督に要望している。また、ブルメは輸送の方法として「受け取った植物を(オランダへ)移送する準備のために、当国立(バ

(29) 栗原福也編・訳『日本報告』、45-47頁。

イテンゾルフ) 植物園で元気をつけるように世話をしたあとで、よい時季をみて、まとめてオランダへ輸送する」という方法を取るのがよいと提案している。これらの方法は、ライデンの大学植物園に、日本の植物をできるだけ増やすように、という目的のもとにおこなわれるのである。ところで、ここで述べられている「植物」とは、具体的にどのようなものだったのだろうか。この書簡を受けたシーボルトからブルメへの返信に、その内容が表れている。

出島 1824 年 11 月? 日

国立バイテンゾルフ植物園長 (C. L. ブルメ) 殿

閣下がもっとも注目すべき植物として知られる日本産植物のリストを私宛てに送り、申しつけられてきたご要望を、いまバタフィアへの帰港船で果たすことができたことを、私はとりわけ嬉しく思います。私はそれによって、いかに私が日本植物の収集と植相の調査に没頭してきたかを証明できたと考えます。閣下のリストには、一部はきわめて珍しい日本植物、一部はほとんど研究されておらず、また高名なツェンベリーが言及し、続いて他の植物学者たちによっても知られてはいるが、われわれにはまだ同定されていない日本植物が記載されております。[中略]

日本における自然学調査を任務とする外科医少佐 Dr. フォン・シーボルト⁽³⁰⁾

ブルメから送付された日本産植物のリストには「きわめて珍しい日本植物」や、「まだ同定されていない日本植物」が含まれていたという。シーボルトが総督に自らの活動を報告する 1824 年 11 月 6 日付の書簡にはこのようにある。

私は長崎の植物のほとんどすべてを [乾燥植物標本にして] 収集し、非常に珍しいものについては一部分植物園で栽培し、その他のものは写生させています。来年には私の薬草学調査の成果をバタフィアでお目にかけられると思います。国立バイテンゾルフ植物園の園長 (C. L. ブルメ) が薬草学の文献から抜き出して私に申し込まれた日本の植物のうち、一部分はきわめて希少で、一部分はまだ不確定の (同定されない) 植物です。[中略] 求められた植物以外にも、私には大事だと思われるたくさんの植物を付け加えました。それらはすべて私が薬草と同定したものです。[中略] これらの植物の送付によっていまや私は薬草学の知識を証明できたと 생각합니다。[中略] 私は目下のところ 300 種類以上を植物園で栽培しているので、それらのうち私が同定したものや非常に珍しいものについては写生が終わり次第、生存している実物の標本を発送します。私の調査と収集によって、薬草学は大きな利益をえるし、オランダの植物園は少なからざる陳列品を入手することになると確信しております。⁽³¹⁾

(30) 栗原福也編・訳『日本報告』、91 頁。

(31) 栗原福也編・訳『日本報告』、67-68 頁。

ここでも、先の書簡と同じく「国立バイテンゾルフ植物園の園長」(C. L. ブルメ)がシーボルトに、「一部分はきわめて希少で、一部分はまだ不確定の(同定されない)植物」を要求してきたことが記述されている。また、「私の薬草学調査」「私の調査と収集によって、薬草学は大きな利益をえる」といった文面を見ると、シーボルトの収集した植物生体の実態が見えてくる。彼の収集した植物生体は、日本産の希少な植物、そして、医学に役立つような性質を持った薬草類であったことが分かる。加えてこの時期、シーボルトは多額の調査費に報いるため、総督への「調査報告」で、収集が「王立珍品陳列室」を飾るためであることを繰り返し強調している。例えば、1823年のオランダ領東インド植民地総督への手紙でシーボルトは彼の調査活動を「王立博物館のために日本の珍奇物の完全なコレクションを手に入れること」としている⁽³²⁾。同じく1824年の総督への報告にも「私の目標は王立博物館を飾り、また学会の収穫となるような品々の収集と調査活動にとりわけ向けられていました」と述べられている⁽³³⁾。

この当時、ヨーロッパ本土では博物学熱が巻き起こり、外来の珍奇な動植物・鉱物に対する注目が高まっていた。本国の科学者たちは植民地に赴いた科学者団と連携し、彼らの伝える新情報と珍奇な収集品を歓迎したのである。また、自然物のコレクション熱の結果、ヨーロッパ各地で王立・公立の博物館・植物園・動物園が設立された。これに触発され、オランダでもウィレム1世によって「王立珍品陳列室」が設置された。この施設は、「自然と文化に関する収集」を目的として1816年に創立されたものである。また、これらの珍奇な外来物品を収集することは国家の威信にもつながった。王立珍品陳列室はナポレオン戦争後の荒廃を経て新しく誕生したオランダ王国の国家的権威の象徴としても機能したのである⁽³⁴⁾。オランダがシーボルトの収集活動を支持した背景には、このようなヨーロッパ本土での博物学熱が関係している。

また、シーボルトはこれら植物園の植物に付け加える形で、日本で栽培されている果樹・灌木を輸送している。ここでは、プラム、サクランボ、モモ、ミカン、ダイダイ、クリ、カキ、クサイチゴなどが品目にあがっており、これらの植物についてシーボルトは、バイテンゾルフで栽培すれば、時のたつにつれて素晴らしい収益がえられるだろうし、梱包を解かないで直接ヨーロッパに送られたならオランダの植物園を飾ることだろう、と付言している⁽³⁵⁾。

(2) シーボルトの任務の変化・1827年6月25日書簡

しかし、シーボルトの活動は、次第にその性質を変えていくことになる。そのような変化を表しているのが、前書簡の3年後である1827年6月25日にジャワ・パタヴィア中央農業委員会から出島・日本オランダ商館長に宛てられた次の書簡である。

(32) 栗原福也編・訳『日本報告』、31頁。

(33) 栗原福也編・訳『日本報告』、61頁。

(34) 栗原福也編・訳『日本報告』、349頁。

(35) 栗原福也編・訳『日本報告』、94頁。

日本オランダ商館長閣下

バタフィア 16(マ)27年6月25日

中央農業委員会・委員会および諸委員は、外部の諸地方で見出され、栽培の対象とされているすべてのもののうち、ジャワで栽培すれば有益になると思われる植物および種子を(当委員会へ)取り寄せることを決定しました。日本国には非常に多様な気候を持つこのジャワ島へ移すことができると思われるたくさんの植物が生育していることを中央農業委員会は承知かつ確信しているので、いまバタフィアを出港準備中の船で、当委員会宛に(日本から)植物を運ぶことを承認されるよう要望します。

以下の植物および種子

茶樹 ウルシ ハゼ タバコ 藍 稲 アマ アサ 小麦 ライムギ ソバ カラスムギ
ブドウ樹

ただ単に実験に供するというだけでなく(マ)、ジャワにおける農業の一部門にまで発展させることに是非とも成功することを目指して、中央(農業)委員会は(商館長)閣下により非常に大量の茶樹、ウルシ、ハゼの種子あるいは苗木を送付して下さるよう要望します。フォン・シーボルト博士により当地へ送られてきた茶樹の種子はすでに2000本から3000本の若木に育っているので、茶樹はこの地では非常によく生育するでしょう。ウルシとハゼの木は日本から少しだけ送られたとしても、きっとよい結果になることと思います。日本のタバコには良質のものは少ないでしょう。藍、つまり青色の染料を作る植物はジャワへ持ってくる価値があると思われます。そのようなわけで、中央(農業)委員会は上に挙げた5種の植物の種子または樹木を大量に送付するようお願いいたします。これらのもの以外では、日本のブドウ樹がブドウ酒を造るのに適している場合に限り、ブドウの種子あるいはブドウ樹を入手できるようにお願いします。(これらの植物や種子を)取り寄せるについて、なんら特別の資金を手当していませんが、そのために必要な費用はわずかな額でしょうから、シーボルト博士の裁量に委ねられている年々の研究費から用立てることができると思います。どのように適切に発送するかについて、中央農業委員会は理論的・实际的に植物に通じている植物学者フォン・シーボルト氏に任せるのが最良の方法だと考えます。中央委員会は発送についても、あれこれの植物や種子の探索や収集についても、同氏の協力をえられることを確信しております。ただ、2艘の船それぞれに半分ずつ送付を引き受けさせることだけを、閣下をお願い申し上げます。(バタフィア中央農業委員長署名)

バタフィア 1827年6月27日⁽³⁶⁾

(36) 栗原福也編・訳『日本報告』、225-227頁。

ここで、バタヴィア中央農業委員会は、「ジャワで栽培すれば有益と思われる外地の植物および種子の取り寄せを決定した」と述べている。その中でも農業委員長は特に、茶樹、ウルシ、ハゼ、タバコ、藍の5種の植物の種子または樹木を大量に送付するよう出島・オランダ商館長に依頼している。これらの品目は、これまでのように日本特有の植物や希少種・新種という訳ではなく、ヨーロッパ向け商品作物として馴染み深いものばかりである。上記5種の他にも、稲、アマ、アサ、小麦、ライムギ、ソバ、カラスムギ、ブドウ樹などが送付希望リストに入っている。それに続いて農業委員長は「(これらの植物や種子を)取り寄せるについて、なんら特別の資金を手当していませんが、そのために必要な費用はわずかな額でしょうから、シーボルト博士の裁量に委ねられている年々の研究費から用立てることができると思います」「どのように適切に発送するかについて、中央農業委員会は理論的・实际的に植物に通じている植物学者フォン・シーボルト氏に任せるのが最良の方法だと考えます」と述べ、輸送に関わる費用上の負担方法や、船舶による輸送方法などについて取り決めている。

この決定に対してシーボルトは後に、「中央農業委員会に是非お願いしたいことは、植物などについてさらに注文される場合には、はなはだ少なからざる費用を支払うために要する資金の手当てをしていただきたいと存じます。そうした費用を政府から(私に)与えられた予算で支払えば、それによって私の学術的調査に支障が出るので、そうすべきではないと考えるからです」と反発を示している⁽³⁷⁾。

1827年6月25日の書簡で注目すべきは、今まで要求されてきた貴重な日本産植物に対して、茶や藍、ウルシなど比較的有名な商品作物を「非常に大量」に要求していることである。また、この「ジャワへの商品作物の大量輸送」という総督府の方針が新規に定められたということは「ジャワで栽培すれば有益になるとと思われる植物および種子を(当委員会へ)取り寄せることを決定しました(傍線部筆者)」という文面からも読み取れる。

また、この中央委員会の書簡が記された3日後の東インド総督府決議の中では、「本国で栽培可能な園芸用植物を多数輸送するよう」シーボルトへ命令が下されている。これに対してシーボルトは、「注目すべき日本の家庭用植物の種子」、「美しく希少な花、不明な花の種子」「日本のすぐれた家庭用植物のいろいろな種子をすでにここ日本で小箱の中へ蒔いた多数の種類(38)の植物、2本ずつ」を、2箱に分けて船舶に積んでいる。また、これら収集植物に加えて彼は大量の植物名が羅列されたリストを総督府に送付しており、そこからは多種多様な日本の園芸用植物がバタヴィアに送付され、そこからオランダ本国へ輸送されたことが分かる。

これらの変化から読み取れるのは、シーボルトに要求される植物学的成果が、王立陳列館の展示品となりうる希少植物や、学問的価値を持つ「新種」の日本産植物などから、商品作物や園芸用作物といったより実際の・商業的、かつ大量生産可能なものに移行していったということである。単なる珍奇品の収集から、より経済的利益をもたらさう食用・園芸用商品作物に、

(37) 栗原福也編・訳『日本報告』、245頁。

(38) 栗原福也編・訳『日本報告』、235-241頁。

総督府の焦点が移行していることが伝わってくるのである。

5 オランダ植民地政策の転換

(1) 1827年の転換

栗原は、1827年6月27日書簡について次のように述べるに留めている。

「付録」3(1827年6月27日書簡のこと。筆者注)は、バタヴィア・中央農業委員会の要請(史料4)に応え、シーボルトが同委員会に送付した日本産の生存植物および種子に添えた簡単な説明書である。バイテンゾルフ植物園が東アジア植物の調査・収集・本国への中継センターとすれば、中央農業委員会は植民地ジャヴァ島の農業開発という行政的、実際の視点から日本の有用植物5種(茶・ウルシ・ハゼ・タバコ・藍)に関心を示し、本国へ輸出する特産物の栽培を模索していたのだろう。シーボルトはこれらのほかに大麦・小麦・ソバ・モチイネ・ワセ・ハタケイネなどの試作を進言しているが、食料の不足するジャヴァ島での穀物増産を意図したものである⁽³⁹⁾。

栗原はバイテンゾルフ植物園を「東アジア植物の調査・収集・本国への中継センター」とし、一方で中央農業委員会を「植民地ジャヴァ島の農業開発という行政的、実際の」機関として区別しているが、このような単純な二分法は必ずしも成り立たない。オランダ領東インドにおける農業政策を見れば、バイテンゾルフ植物園がジャワの「行政的、実際の」な面と大きく関係していることが分かる。先述したように、1848年にはアブラヤシが西アフリカから移入され、南米原産のキャッサバが東インド全土に広められた。また、3代目園長のシェファーはオーストラリアのユーカリ、タバコ、リベリアのコーヒーなどの台木を育成して種や接ぎ木を全土に配布している⁽⁴⁰⁾。また、栗原の考察は、なぜ1827年になって初めて東インドがシーボルトに商業作物を要求し始めたのかという疑問に答えていない。

(2) ファン・デル・カペッレン更迭とシーボルトへの影響

この時期のシーボルトの活動を読み解くためには、オランダ本国の植民地政策の変化を読み取る必要があるのではないだろうか。そう考えたときに注目すべきは、オランダ政府が1826年にファン・デル・カペッレンの東インド総督の任を解き、本国へと更迭していることである。シーボルトの日本での総合的学術調査がファン・デル・カペッレンの個人的な好意によって大きく支えられていたことは先述した通りである。であるならば、カペッレンの失脚はシーボルトの活動に少なからざる影響を与えたはずである。実際にカペッレンが自らの任期中「自分が

(39) 栗原福也「オランダ領東インドとフォン・シーボルト (i)」『洋学』第6号、洋学史学会、1998年、172頁。

(40) 野間、前掲論文、121頁。

更迭されたら、シーボルトの博物学調査はないがしろにされるだろう」と語ったという書簡が残っている。1826年はシーボルトの日本滞在期間のちょうど「折り返し」にあたる時期である。この時期におきた政治的な変化がシーボルトの任務に与えた影響について栗原は言及していない。

シーボルトが出島で活動した同時期のジャワ島では、中央集権を目指す東インド政庁とマタラム王国との間でジャワ戦争（ディボネゴロの反乱、1825-30）が勃発・激化していた。この戦争を遂行するための防衛費は膨れ上がり、ナポレオン戦争以降の負債を抱えるオランダに重くのしかかった。この財政危機を乗り越えるべく、オランダ本国は東インド植民地に対して、より大きな経済的利益を生み出すよう要求し始めたのである。1825年の議会への年頭演説でウィレム1世は植民地のために発行された公債が1815年から10年でおおよそ2倍になっていることについて触れ、植民地への「早急かつ直接的な介入」を宣言した⁽⁴¹⁾。植民地財政を改善すること、植民地からより大きな利益をもたらすこと、このような本国の要請に対し、東インド総督ファン・デル・カペッレンは応えることができなかった。加えて、彼は自らの自由主義的思想から、1824年に新設されたネーデルラント通商会社（Nederlandsche Handel-Maatschappij）に対しても非協力的な姿勢を示した⁽⁴²⁾。この通商会社は半国営企業であり、オランダと東インド間の輸出入を独占的に担った。カペッレンの通商会社への態度は王の不興を買い、彼の1826年の更迭を招くことになる⁽⁴³⁾。

このような時代状況を踏まえて新たにシーボルト関連の書簡を読み直してみると、様々なことに気づかされる。カペッレン更迭後、1827年6月20日の東インド総督決議録には、シーボルトの日本における博物学調査の費用をできる限り削減することが明記された⁽⁴⁴⁾。この決定に対してシーボルトは「私はいまバタヴィア当局の命令に従うことを残念に思います。この命令は博物学だけでなく、すべての学問分野をも包含する調査（中略）の大事な局面において、さらなる節減を勧告しているのですから」⁽⁴⁵⁾と抗議している。博物学研究費の削減に加えて、総督府はシーボルトのもとで勤務していた画家C. H. デ・フィレネーフェのバタヴィアへの帰還を許可した。画家を失えば、希少な動植物の正確なスケッチを残すことは不可能になる。シーボルトは総督府宛の書簡で、画家がバタヴィアに帰還することになれば、シーボルト自身の博物学調査の目的からして、「疑いもなく落胆させられる」⁽⁴⁶⁾だろうとして強く反発している。

ファン・デル・カペッレンの更迭後、ジャワへの商品作物輸送、博物学調査研究費削減、絵

(41) Weber, *op. cit.*, p. 191.

(42) 栗原福也「来日の課題と背景」、17頁。

(43) E. Horlings, 'Miracle cure for an economy in crisis? In colonial exploitation as a source of growth in the Netherlands 1815-1870', in B. Moore and H. van Nierop (eds.), *Colonial Empires Compared: Britain and the Netherlands, 1750-1850*, Ashgate, 2003, pp. 154-155.

(44) 栗原福也編・訳『日本報告』、223頁。

(45) 栗原福也編・訳『日本報告』、230頁。

(46) 栗原福也編・訳『日本報告』、229頁。デ・フィレネーフェはシーボルトに配慮して1830年までバタヴィアに帰還しなかった。

師の帰還許可などが相次いで決定された。ここからは、東インド総督府がシーボルトの学術調査を制約し、より実質的・経済的な利益を彼に要求し始めたことが読み取れる。その背景には、10年前のナポレオン戦争と継続中のジャワ戦争で生じた莫大な負債を受け、植民地からより直接的な利益を求めようとする本国オランダの姿があった。シーボルトの任務の中心は、1824年の段階では、王立陳列館に収集しうる博物学的に希少な日本産植物を収集し、本国オランダに輸送するという「博物学的」な部分にあったが、1827年においては、より直接的にオランダ経済へ貢献すること・ジャワの農業政策に貢献することに変化したと言える。科学史の研究者であるアンドリュー・ゴスは、オランダ領東インドの農業政策を支え、植民地統治に一定の役割を果たした東インドの科学者たちをテクノクラート集団“floracrats”（植物官僚）と呼んだが⁽⁴⁸⁾、シーボルトの日本滞在後期（1827年以降）の活動も、この floracrats に近いものに変化していったと言えるのではないだろうか。

(3) シーボルトの貢献

ここまで、オランダの「植物学ネットワーク」の一端を担う存在としてシーボルトを位置づけることで、従来の彼の存在を新たに描きなおすことを試みてきた。それでは、シーボルトは期待された任務をどの程度遂行することができたのだろうか。

シーボルトの貢献としてもっとも有名なのは、まず、茶樹の種子を独自の方法でバタヴィアに送り、移植に成功したことである。⁽⁴⁹⁾1827年の書簡には、「フォン・シーボルト博士により当地へ送られてきた茶樹の種子はすでに2000本から3000本の若木に育っているので、茶樹はこの地では非常によく生育するでしょう」という文面がある。バタヴィア中央農業委員会が大量の茶を要請する以前から、シーボルトは日本で入手した茶樹の種を定期的にジャワに輸送していた。1827年の中央農業委員会の要請に対して彼は「茶樹は移植によって栽培を続けることはできません。それゆえ、種子だけですが、その代わり広く、最高の茶を産する地方から取り寄せたものを送りますが、すぐに容器から取り出して、あとで移植することを避けるため、（茶園に）予定された農園への蒔きつけを要します。」と述べ、大量の茶の種を輸送している。茶の輸送はシーボルトの帰国後も続けられた。彼の後継者として出島に着任した医師・科学者のビュルガーがシーボルトに送った書簡によれば、1830年にはさらに25万粒の茶樹の種が日本からジャワに移植され、「よく生育している」とある。ビュルガーはまた、「Java（ジャワ）で

(47) 無論、純粋科学が成立する以前の時代において、いわゆる「学問的功績」と経済的利害を完全に分離したもものとして議論することには問題がある。18世紀後半からのいわゆる「博物学の黄金時代」におけるヨーロッパでは、「珍奇品の収集・売買」といった文脈と未分離な形で専門家／アマチュアによる科学実践がおこなわれていた。西村三郎『文明のなかの博物学 西欧と日本』紀伊國屋書店、1999年、参照。

(48) Andrew Goss, *The Floracrats; State-Sponsored Science and the Failure of the Enlightenment in Indonesia*, University of Wisconsin Press, 2011, pp. 30-34.

(49) シーボルトの最大の貢献は、粘土と土を層状にいれた箱を用いることで水分を保ち、茶の種子の輸送に成功したことだった。さらに茶の栽培方法についても、協力者のビュルガーに報告書を提出している。松井洋子『ケンペルとシーボルト「鎖国」日本を語った異国人たち』山川出版社、2010年、53頁参照。

のお茶の文化の成功が望まれます」と述べている。⁽⁵⁰⁾

シーボルトと中央農業委員会が交わした書簡からは、彼のプラントハンター（植物採集者）としての手腕が伝わってくる。書簡によるとシーボルトは「送付作物リスト」にある商品作物に加え、「カキ、オレンジ類、ウルシとハゼ、ホウキ草」や「非常に多くのブドウ樹」、「種々の家庭向き（庭園用）植物の種子」などをジャワに送付している。シーボルトは自らの任務を果たしたことを証明したのち、各植物について簡潔な考察を示している。例えば藍については「藍は日本で普通に見られます。中国とコーチシナで青色の染料に使用されています。小インディゴという名前でフランスの植民地でよく栽培されるようになっております」と記している。また、タバコについては「タバコは日本の南部地域で立派に成育します。しかし、私は少量ながら最良の種子を薩摩から入手することができました。ただしタバコは長崎地方でもたくさん生育しております」という解説を載せている。⁽⁵¹⁾

シーボルトはヨーロッパに帰った後、自らの民俗学研究を『日本』の大著にまとめ、日本学の大家としてヨーロッパで名をはせることとなった。同時に、彼は 1840 年代にウィレム 2 世から勅命を受け、C. L. プルメと伴に王立園芸奨励協会を設立し、また、日本・中国産の植物の販売をおこなう「シーボルト商会」を立ち上げている。⁽⁵²⁾この商会はオランダの保護の元、バイテンゾルフ植物園からネーデルラント通商会社によって運ばれてくる植物を独占的に取り扱うようになった。彼がヨーロッパにもたらしたアジア産植物の中で特に有名なのが、日本産のカノコユリである。このユリは花の大きさと色の鮮やかさから、イギリスを中心に熱狂的な流行を引き起こした。⁽⁵³⁾ 帰国後のシーボルトがおこなった植物販売ビジネスはオランダ国家の全面的な支援の下で行われていた。これは、シーボルトの日本における植物採集・輸送の手腕がオランダ政府に高く評価されていたことを示していると言えるのではないだろうか。

6 おわりに

ここまで、出島を 19 世紀オランダの「植物輸送・研究ルート」の一端に位置づけることにより、シーボルトを「植民地科学者」として捉え直し、彼とオランダ本国・東インド総督府との関わりを見ることによって、19 世紀オランダ植民地周辺における帝国と科学者とのあり方を考察してきた。そこで明らかになったのは、シーボルトに期待される任務の性質が 1827 年を境により实际的・商業的利益に繋がるものへと変化していったということである。その背後には、ナポレオン戦争・ジャワ戦争による負債を解消するべくより大きな利益を植民地から求

(50) 海老原温子、野藤妙、宮崎克則、リザ・エライン・ハメケ「1831 年 ビュルガーがシーボルトに出した書簡」『九州大学総合研究博物館研究報告』第 11 号、2013 年、49 頁。

(51) 栗原福也編・訳『日本報告』、245 頁。また、総督府の報告によれば、これらの植物はバタヴィアに「無事到着している」。

(52) Goss, *op. cit.*, p. 62.

(53) 川島昭夫『植物と市民の文化』山川出版社、1999 年、517-518 頁。

表1 ジャワ・マドゥラの主要品目対外輸出額推移 (単位: 1000 グルデン / %)

表2.3a ジャワ・マドゥラの主要品目別対外輸出額推移 (1822-1873年 単位: 1000ギルダー)

年	香辛料	砂糖	米	コーヒー	タバコ	茶	藍	銅	綿製品	錫	計
1823-25年平均	1,084	507	118	10,358	120	8	22	218	207	891	13,526
1826-30年平均	694	824	267	6,221	59	12	77	648	202	832	9,835
1831-35年平均	1,252	3,371	1,419	10,093	45	4	482	167	290	1,422	18,513
1836-40年平均	2,211	10,295	2,034	21,907	136	121	3,315	—	364	2,402	42,785
1841-45年平均	1,790	13,476	1,635	24,232	793	344	5,289	437	317	3,050	51,187
1846-50年平均	1,736	18,446	2,037	16,021	712	521	4,001	352	497	4,480	48,804
1851-55年平均	1,531	19,986	2,061	26,729	707	424	3,497	237	608	3,722	59,502
1856-60年平均	1,424	32,214	5,717	32,740	1,005	740	3,835	251	734	7,337	85,945
1861-65年平均	1,030	32,958	2,254	36,616	1,692	863	3,792	—	1,185	7,036	87,425
1866-70年平均	1,102	33,282	2,164	37,052	3,320	1,011	3,224	—	1,046	6,277	88,479
1871-73年平均	1,597	46,203	1,633	40,717	8,149	2,149	2,645	—	1,883	8,201	113,177

表2.3b ジャワ・マドゥラの主要品目別対外輸出額推移 (1822-1873年 単位: %)

年	香辛料	砂糖	米	コーヒー	タバコ	茶	藍	銅	綿製品	錫	計
1823-25年平均	8.0	3.7	0.9	76.6	0.9	0.1	0.2	1.6	1.5	6.6	100.0
1826-30年平均	7.1	8.4	2.7	63.3	0.6	0.1	0.8	6.6	2.0	8.5	100.0
1831-35年平均	6.8	18.2	7.7	54.5	0.2	0.0	2.6	0.9	1.6	7.7	100.0
1836-40年平均	5.2	24.1	4.8	51.2	0.3	0.3	7.7	—	0.9	5.6	100.0
1841-45年平均	3.5	26.3	3.2	47.3	1.5	0.7	10.3	0.9	0.6	6.0	100.0
1846-50年平均	3.6	37.8	4.2	32.8	1.5	1.1	8.2	0.7	1.0	9.2	100.0
1851-55年平均	2.6	33.6	3.5	44.9	1.2	0.7	5.9	0.4	1.0	6.3	100.0
1856-60年平均	1.7	37.5	6.7	38.1	1.2	0.9	4.5	0.3	0.9	8.5	100.0
1861-65年平均	1.2	37.7	2.6	41.9	1.9	1.0	4.3	—	1.4	8.0	100.0
1866-70年平均	1.2	37.6	2.4	41.9	3.8	1.1	3.6	—	1.2	7.1	100.0
1871-73年平均	1.4	40.8	1.4	36.0	7.2	1.9	2.3	—	1.7	7.2	100.0

W. L. Kortals Altes, *Changing Economy in Indonesia, XII: General Trade Statistics 1822-1940*, Amsterdam: Royal Tropical Institute, 1991, Table 6A より計算。

出典: 加納啓良『現代インドネシア経済史論——輸出経済と農業問題』東京大学出版会、2004年、17頁。

めるオランダ国家の姿があった。

1820年代中盤からウィレム1世が模索していた新しい植民地政策は、シーボルト帰国の1年後に結実する。1830年に新しく東インド総督の座に就いたファン・デン・ボス(1780-1844)の元で「栽培政策」(Cultuurstelsel, 日本ではしばしば「強制栽培制度」と訳される)が開始されるのである。ジャワ戦争後、ファン・デン・ボスはこれまで不徹底とはいえ続けられてきた自由主義的方针を一転させ、在地首長層に大きな権限を与えた。そして、彼らを駆使して農地の20%を強制的に接収し、そこに植民地政庁指定の輸出向け農作物を植えつけさせた。半国营企業のネーデルラント通商会社がヨーロッパ向けの商品作物輸出を独占し、1870年代までに総額7億8000万グルデンという巨大な利益をオランダにもたらした。この額は、制度導入時に植民地政庁が抱えていた負債を差し引いても、純益6億グルデンを本国に送金したことになる⁽⁵⁴⁾。1830年代~1840年代には植民地余剰はオランダ国家歳入の年平均19%を占め、栽培政策最盛期の1850年代には年平均で32%にも達している。栽培政策はオランダの負債を解消して経済危機を打破し、工業化の財源をもたらす「オランダの命綱」となったのである⁽⁵⁵⁾。栽培政策において政庁が指定した主な栽培品目は、コーヒー、砂糖、茶、タバコ、藍などであった。これらの商品作物のいくつかは、シーボルトが採集・輸送を命じられた作物と一致している(表1)。

(54) 宮本謙介『概説インドネシア経済史』有斐閣、2003年、100頁。

(55) Horlings, op. cit., pp. 154-155.

オランダ経済史の専門家である E. ホーリングスは、栽培政策の本格的な開始は 1830 年であるが、それ以前からジャワ島における商品作物栽培は模索されていたと述べている。⁽⁵⁶⁾ バタヴィア中央農業委員会がシーボルトに商品作物を送るよう要望した 1827 年の書簡には、「ただ単に実験に供するというだけでなく (ママ)、ジャワにおける農業の一部門にまで発展させることに是非とも成功することを目指して」という文面があった。残念ながら今回の論文ではジャワの農業政策を先導した「バタヴィア中央農業委員会」の詳細について十分明らかにすることができず、シーボルトが送った商品作物がその後どのような形で馴化され、研究され、栽培されたかを明らかにすることはできなかった。また、シーボルトがジャワに大量に持ち込んだ日本産植物が 1830 年代、1840 年代にどのような道筋をたどったのかも調べることができなかった。しかしながら、シーボルトがファン・デン・ボスの栽培政策とつながる世界史上の流れと同じ時代・同じ場所で活動しており、植物輸送のネットワークを通してその流れと深くかかわっていたことは明らかであり、彼と 1830 年代オランダの栽培政策との繋がりについてはより詳細な研究が求められている。

(56) Horlings, op. cit., p. 153.